

教会は大震災にどう関わったのか：

3・11 支援教会、教団のリーダー達に聞く

渡辺 聡

リサーチのコンテキスト

2011年3月11日東日本を襲った大地震は、巨大津波を伴う事によって東北、関東の沿岸地域に甚大な被害をもたらし、さらに津波による福島第一原発事故はこれまでの自然災害の枠を超えた深刻な社会問題を引き起こした。行政や民間ボランティア団体と共にキリスト教界からも様々な形での支援活動がなされたが、震災から1年を過ぎた現在、各教団のこれまでの活動の実態を総括することは、今後の支援活動の方向性を見出すために必要であろう。しかし各教会の働きは多様性に富み、数多くの教会が同時に支援活動を行っているから、それらの活動全てに言及し包括的にレポートすることは不可能である。そこで、活動を展開した教会のうち代表的とみなされるグループを複数サンプリングし、そのリーダー達にインタビューを行う事により、その全体像を大まかに把握するよう試みることにした。

今回インタビューに応じていただいた方々は、日本基督教団、日本バプテスト連盟、南部バプテスト宣教団、日本バプテスト教会連合、日本バプテスト同盟、同盟キリスト教団、日本ホーリネス教団、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団に属する人たちで、直接支援に携わった経験を持つ教団リーダーや教会の牧師たちである。インタビューは基本的に個人に対して行ったが、教団のリーダーだけでなく現地の活動責任者が同席するというケースも複数あった。インタビューはそれぞれ1時間ほどのもので、大まかなインタビュー・ガイドを用いて経験や意見を聞いた。またインタビューを行った期間は、2012年1月から5月上旬にかけてである。インタビューはICレコーダーに録音記録された。¹

また、日本バプテスト連盟についてはその教団のリーダーとは別にそれに属する各個教会のひとつである東京バプテスト教会の宣教担当牧師にもインタビューを行った。日本バプテスト連盟という同一教団内ではあるが、それぞれ異なる立ち位置でのユニークな支援活動がなされていることから、別のグループとしてインタビューをする事にした。

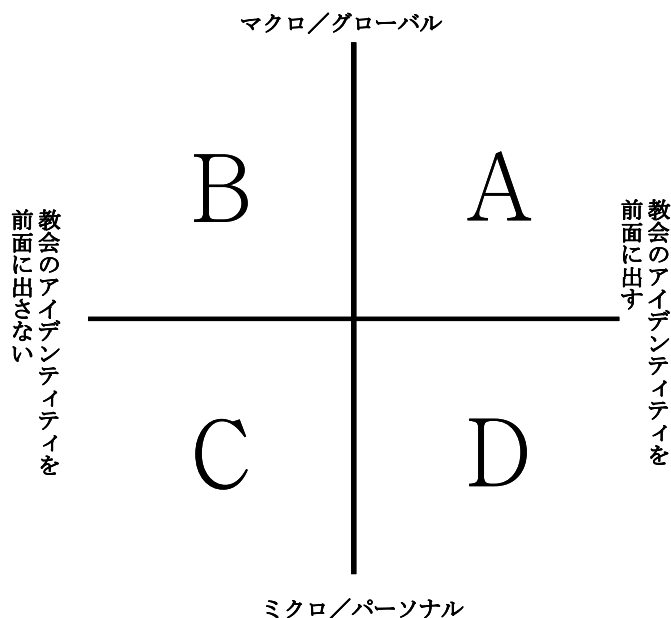
4つのタイプへの類型化

インタビューを整理する際に、それぞれの教団の傾向を把握しやすくなるように、それぞれのグループの震災への取り組みの態度を4つのタイプに類型化した。縦の軸にそのグループが社会問題に対しグローバルな関心を有しているか、ミクロな関心を有しているかという理念系を設定した。グローバル的であるとは、震災への関心が原発事故のような社会的な側面に置かれていることであり、政府への抗議文の送付や講演会を行ったり、

¹ 例外は南部バプテスト宣教団で、インタビューは2011年7月に行われ、インタビューの記録は筆記メモのみである。

日本の倫理的退廃や異教文化に対する神の裁きとして震災を捉えパブリックな場で警告を発するというように、被災者へのパーソナルな関係というよりは、より客観的で距離を置いた方向性を持つということである。それに対してミクロ的であるとは、ある特定のコミュニティに腰をすえ、そこで出会った特定の人々と親密な人間関係を築き、その中で支援をしていくという方向性である。インタビュー中に「あなたのグループは原発事故に関して、政府に抗議文の送付を行ったり、講演会を主催したりしていますか」という質問をし、それに対する返答の内容に基づいてカテゴリー分けをした。グローバルとミクロの対比によってそれぞれの教団が被災者に対し第3者的で距離を置いた対応をしているか、それともパーソナルな関係を持って対応しているかという態度の違いを見出すことが出来るかもしれないと考えた。

次に伝道に対する態度を、横軸に理念系として設定した。被災地で出会った人たちに対し、救いを得るために罪を悔い改めて神に立ち返れというメッセージを明確に宣教するグループがあり、それとは対極的に伝道はせず、自分達をキリストの愛を実践する援助者として捉えるグループがある。それは自分達の語るメッセージの内容に価値を置いているのか、実践している行為の内容に価値を置いているのかという点からの対比としても捉えることができる。インタビュー中に「あなたのグループでは支援をする際に、罪と悔い改めやキリストを信じることの大切さを被災者に言葉で伝えようとしていますか?」という質問を用い、それへの応答を見てカテゴリー分けをした。



この2つの軸を基に4つの理念型を設定すると、それぞれは以下のようなイメージとして捉えることができる。タイプA（第1象限）：神の裁きを強調し、人々の悔い改めを求めるが、それはパーソナルな関係を基になされるのではなく、パブリックな場での言葉での宣言としてなされる。悔い改めるべきは、日本国民や為政者であり、また神の御心から倫

理的に逸脱した日本文化とその担い手である。ひとつの例としては、クリスチャン新聞によって「ドイツ系異端」のメンバーが、東京、大阪、被災地の教会、キリスト教団体、避難所に入り、現場を困惑させたという例が報告されている。彼らの主張は、「今回の震災は神の裁きである」、「罰は神の愛だ」、「さばきを伝えないクリスチャンは裁かれる」といったもので、支援活動をしている教会の礼拝中に現れ、マイクを握ると、彼らの主張を一方向的に語り、去っていくというものだ。² ただしこのリサーチでは、タイプ A に属するグループに直接的にインタビューをする機会は得られなかった。タイプ B (第 2 象限) は A と同様にグローバルであるが、より社会政治的な側面に関心を持ち、自分達の意見を発信する対象も政府や行政機関であり、被災者に対して個人的な関係を深めていくというよりは、講演会やシンポジウムといった活動に関心を持つグループである。タイプ C (第 3 象限) は、被災者の傍らに寄り添い物心両面でサポートするが、キリスト教的なメッセージを直接言葉で伝えることを控えるグループである。それに対しタイプ D (第 4 象限) はタイプ A と同様に自分達の宗教的アイデンティティを前面に出し、相手にキリスト教的メッセージを言葉で伝えるが、方法論的にはよりパーソナルで、被災者に寄り添う形での支援を行っているグループである。

ただしこれらの類型を用いるとしても、タイプ B に分類されたグループが被災者に対する直接的な炊き出しや心のケアをしていないと言っているわけではない。また、タイプ D が宣教活動だけ行っていて物質的な支援活動を行っていないということでもない。また支援活動の時間的な経過と共に、タイプ C がよりタイプ D に近づくという例や、タイプ B がタイプ C に近づいていくというような例も見られる。

さらに、タイプ分けについては、インタビューした教団に対する一般的な評価によってではなく、あくまでもインタビューした個人の回答の内容に基づいて行っている。このリサーチの目的は、上記のような方法で類型化されたグループ間の比較をおこなうことであるので、回答者の発言には匿名性を持たせている。インタビューした複数の教団が同一のタイプに属する場合、(B-1)、(B-2) や (C-1)、(C-2)・・・のようにタイプを表すアルファベットを最初に記し、次に数字で異なる教団を区別し、また同一教団内に複数の回答者がいてその発言を引用した場合は (B-2-1)、(B-2-2) のように記して回答者を区別している。

支援活動の経過

3月11日の震災によってもたらされた大きな混乱の中で教会の支援活動はそれぞれ手探り状態で開始された。多くの教派はまず自派に属する東北の教会への安否確認を開始した。情報が混乱する中、直接現地入りして様子を把握しようとした牧師たちもいた。「国道6号線を避難者の車で渋滞する反対車線を横目に見ながら北上した。翌週は仙台に入り、次い

² 「注意。『神のさばき』『あなたの罪のせい』主張のグループに被災地困惑」
<http://jpnews.org/pc/modules/mysection/item.php?itemid=223>

で石巻に入った。当時報道でボランティアは現地に行くべきでないという情報が流され、教団内からも『迷惑になるのでは』という声が上がったが、行ってみると『猫の手も借りたい』という状況だった」(B-1)とある教団の支援担当者は試行錯誤で活動を始めた当時の様子を振り返る。

現地の教会はさらに混乱の只中であつた。「渦中にいながら状況が全く把握できなかった。ニュースは何日もたってから入ってきた。巨人か怪獣に振り回されているかのような感じだった。信徒の安否の確認、保育園の子供の引き渡しなど深夜までかかった。自分の生活圏の中でも何人も人が亡くなっている。混乱と非常な緊張の中での時間だった」(C-1)と、現地教会の牧師は語った。

福島原発事故は、そのような混乱にさらに拍車をかけた。いわきに支援物資を届けたあるグループは「情報がないまま、とりあえず線量計を身につけて現地の教会に物資を届けた。現地の教会は放射能についてまだ状況を知らされていないようであつた。自分たちも被ばくするのではないかとかなり緊張感があつた」(D-1)と言う。また、福島県外であっても、被災した地域では、正確な情報が得られないために混乱があつた。「女川(原発)の情報が脅威だった。福島の情報も断片的にしか入らなかつた。福島原発のせいでこのあたりも危険だというようなデマが飛び交つた。自衛隊が出動しているというのは嘘でこの辺りは見捨てられたというデマもあつた。たまたま海外からのEメールがつながると『逃げろ』』と言う。非常な緊張感があつた。6月までそのような感覚が続いた」(C-1)。

そのような混乱の中ではあつたが、多くの教団では直ちに支援本部が立ち上げられ、情報の発信と支援金の受け取り、物資やボランティアの派遣等が組織的に行われるようになった。当初は自派の教団内での情報収集や支援活動が活動の中心であつたが、次第に教団、教派の枠を超えた支援活動を行うグループが現れ始めた。教派を超えたネットワークの形成には「フェイスブックやツイッターが威力を発揮し、また牧師たちの神学生時代の教派を超えた個人的なつながりが役に立った」(B-1)。また、阪神大震災の反省が積極的に生かされたケースもあつた。「阪神大震災では支援活動が自分の教団内だけで行われていたという反省から、教派に関係のないところにも手を伸ばす必要があると考え、それを踏まえた新たな行動マニュアルがすでに全国の教会に送られていた。それによって以前よりも広く迅速な活動を行うことが出来た」(C-2-1)という。

諸教会による初期の主な活動は避難所への炊き出しと物資の支援であつた。キリスト教のNGO支援団体が現地入りすると、それらのNGOに協力してボランティアを送る教団や教会も増えた。また現地の教会ではボランティアに宿泊場所を提供したり、事務所を設けてボランティアの受け入れを手伝ったりした。

夏に向かい支援の場は避難所から仮設住宅へと移って行く。同時に津波で家を完全に流されることになつた在宅被災者への支援の必要性も明らかになっていった。道路が復旧し食料が地域に供給されるようになると、支援は炊き出しから瓦礫の撤去や泥かき、壊れた建物の修復といった内容に移っていく。

夏も終わりそれらの活動が一段落すると、教会の活動はハンドマッサージやカウンセリング、子供の学習支援といったソフト面にシフトしていった。2012年に入り、日本国内および海外からのクリスチャンボランティアの数も減り、支援内容も緊急性を求められるものから、長期的な展望を必要とするものに移り変わってきた。その中で、教会はこれからの支援のあり方について模索する時期に入っているとみえる。

人との出会い

タイプ B に分類したある教団のリーダーは自分達の支援を「神との関係の回復」、「人と人との関係の回復」「原発立地で不自由している人たちとの関係の回復」として捉えた (B-2-1)。彼らが被災地に行くのは「そこでイエス・キリストに仕え、人々に仕えるためである。イエス・キリストがすでにそこに行って働いているので、イエス・キリストを探しに行く」、また「ここにもイエス様がいるのだなということを見出すために行く」のだという (B-2-1)。そして「被災者が単にかわいそうだと思って行くのではなく、彼らとの関係の回復の中で私たち自身の生き方を変えることができるように出かけていく。私たちが東京でちゃんとしていくためには、私たちの生き方が問われているのである」と述べる (B-2-1)。このように、支援の動機は、人に仕えると共にそれを通じた神学的な自己反省の機会を得ることである。

「支援活動を行うとき、あなたにとって最も意味を持つ聖句は何か？」と聞いた時、B タイプの回答者は「(イエスは) まず人の痛みに触れて涙を流す。(苦しんでいる人たちと) 同じ立場で神に祈る。だからそこにいた人たちにイエスの祈りは響いたのだ」(B-2-1) という。また同じ教団の支援責任者は、使徒言行録 27 章を示し「船が難破した時、元気を出せ、どこかの島に着くと何の根拠も持たず信じているパウロの姿が印象的である。彼は、不安に陥っている人々の中で道化のような役回りをしている。自分達の働きもそうでありたい」(B-2-2) と答えた。これにみられるように B タイプの一つの特徴は、支援活動そのものに加えて苦しんでいるものの傍らに立ち、自分達もそれを共有する事に重点が置かれているということである。

B タイプのインタビューを通じて感じたのは、彼らが被害者とのパーソナルなつながりよりもコミュニティ全体の課題というような、よりマクロな視点から現状を分析している点である。現地の人たちとの関係については、「初期のハネムーン期がしばらく続いたが、その後避難所のリーダーが行くたびに疲れている事に気がついた」という。彼らが支援していた現地リーダーは仲間から「嫌われていた」人だったというのである。「自分達がリーダーを支援することで、コミュニティを壊してしまった」という反省が述べられた。彼らは「違う漁村がそれぞれにライバルである事にも気がついた」という (B-2-2)。その視点は、一人の人に対する関わりよりも、コミュニティ全体のダイナミクスを分析する方に向かっている。

B タイプでは、支援はひとつの活動の領域として捉えられている。「支援は止まって良い

し早く止まるべきだ。(教会による効果的な支援活動の結果) 支援なんてしなくても良いという状況を作れば次はホームレス(支援)というような違うところに向かう。ホームレス(支援)も行政が動くようになったのでだんだん仕事がなくなってきた。それならばまた次のところへと、何かを生み出しながらその働きをクリスチャンでない人たちに譲っていて、次の病んでいる場所に祈りを向けていくのが私たち(の仕事)だと思っている(B-3)という言葉にこの点が要約されているように思われる。

またBタイプのあるグループでは、「まんべんなくやろう」という動機から繰り返し同じ被災地に入るのではなく、「なるべくいろいろな所に行ってみた」といい、「協力する団体もいろいろと変えてみた」という(B-1)。しかしこの方針は同時に支援者と被災者との個人的な関係性の深まりを阻害しているようにも見える。なぜならば「要請があった所に行くという方針だったので、1回きりしか行けなかったところもあり、出会いがそれきりになってしまうこともあった」(B-1)からである。

タイプBのグループが被災者と出会う時、特に配慮をしているのは彼らのプライバシーであった。「カメラを使わない」、「根掘り、葉掘り聞くのではなく、向こうが言うことだけを聞く」事を心がけた。こちら側から被災者に話をするを求めないのは、「彼らがつらかったことを思い出すことでショックを受けてしまうことがないように」(B-2-1)である。これらはほとんどのタイプの教会支援者が配慮した点であるとは思いますが、これがあまり強く出ると被災者に個人的に声をかけることが出来なくなり、物資を運んで分配するだけの傍観者で終わってしまう可能性がある。

それに対してタイプCの教団リーダー(C-3)の場合は、被災者に対する、よりパーソナルな体験についての思い出がより強く表出される。「活動の初期に個人的な出会いがあった。子供が被災後初めて人と笑顔で話しているのを見て、母親が喜んでくれた」という。その出会いは、彼らの後の支援活動に方向性を与えた。自分達が出会った母親達からの直接的なリクエストを受けて、彼らは子供支援や学習支援に力を入れる事になっていった。

タイプDの教会の支援プロジェクトリーダーも同様に、パーソナルな体験を語る。「こんにちとはと一人一人に声をかけて握手した。苦難の中にいる人たちに対して『元気ですか?』とはなかなか言えなかったが、女性たちに『素敵ですね』『きれいですね』『年いくつですか』『まだ若いんですね』などと言うと笑ってくれた。津波のことについて、こちらからあえて聞いたりしなかったが、炊き出しを待つ行列の中に入って行って、人々の手を取って祈った。一緒に行った教会のメンバーの一人は短い聖書のスピーチをした。『私たちは教会から来ました。最初に祈りをしてから炊き出しを始めたい』と言って始めたが、それに対して拒否的な人たちはいなかった」(D-1)という。また「一緒に出かけて行った信徒メンバーが積極的に話かけをし、福音を伝えたので2011年5月には炊き出しに集まってきた人達の中から最初の入信者が与えられ、炊き出しの行列の人々が見守るなか、まだ瓦礫の残る駐車場で洗礼式が行われた」(D-1)という。

宣教活動に対する異なるアプローチ

B-2-1は、インタビューをした2012年2月の時点で、現地で伝道活動をすることは時期尚早であると考えていた。彼は「海外から支援に来た宣教団体が最初から伝道用トラクトを配っているのを見て違和感を感じた」という。「炊き出しのご飯と聖書を同時に差し出すのは、弱みを持っている人たちに乗じて伝道することである。弱みに付け込んで伝道していると思われるのではなく、寄り添って痛みを分かち合う事によって伝道したいのだ」という。

C-3と彼の現地コーディネーターは、伝道に対する考え方では、B-2と同様である。彼は、「被災地の中でクリスチャンとして、神を知っている人間として、(自分達が)生きている姿を見せる事によって、どうやって(被災者が)生きて行けばよいのか、どうやって立ち上がれば良いのかということ(を示し)サポートしていきたい」という。それは言い換えれば「一緒に歩いている」ということである。「私たちがいなくても彼らが立ち上がればよい」「私たちがリードするのではない。主体は彼らの中にある」(C-3)という言葉の中に、自分達の持っている信仰の内容を絶対化すべきではないという意識を見ることが出来る。

タイプBとタイプCの宣教戦略に対する基本スタンスも類似している。タイプBのあるグループは「被災地に教会を開拓することはあえてしないようにしている」(B-1)という。またもう一つのグループは「教会は(戦略的に作ればよいというのではなく)自然に出来ればよい」(B-2-1)と考える。これと同様にタイプCのグループも積極的に現地で開拓をしようとは考えていない。「現地の人たちと個人的に親しくなるという状況はそれほどはなかった。むしろ現地の教会の人たちが(現地の人々)と親しくなっていて欲しい。自分たちは2年後に撤収するのだから伝道はしない。『なぜ来ているのか』と聞かれたら『クリスチャンです』とは言いが、伝道はやらないという方針である。また(現地教会からも)伝道はすると言われていた」(C-2-1)。同じ教団の他のリーダーも「伝道はしない。もし、福音について聞かれればそれに答えることは願わしいが、むしろ黙々と仕えることを大切に。自分たちがしていることは将来の種まきのためにクワを入れているようなものであると考えている」(C-2-2)と答えた。

伝道をすべきではないというスタンスは、BとCのいくつかのグループでは徹底して実践された。例えば、全国の教会から集められた支援物資の中に聖句を記したカードなどが添付されていた場合、それを外してから現地の人に手渡すというような形になって表れた。現地担当者の判断でそれがなされた場合もあるし(B-2-1)、また協力関係にあるキリスト教系の支援団体の方針に従ってそれを外したケースもあった(C-2-2)。「イースターエッグのイースターという言葉はキリスト教的なので、それを外してゆで卵だけ持って行ったケースもあった」(C-2-2)という。

それらに対してタイプDのグループでは、「教会を造るなら今だ。しばらくすると戸はまた閉ざされる」(D-2)という開拓伝道への強い意志を持つものがある。他の回答者も「当初から宣教は視野に入っていた。後々支援センターが宣教センターになるという視野を持

っていた」(D-3)という。彼はさらに「最初被災地に入った時は(自分たちがクリスチャンであるという)自己紹介はしたが福音の分かち合いまでは出来なかった。しかし、人々との関係性が出来てくると、だんだんとそれが出来るようになっていった。月一回の炊き出しが半年後には基督教の家庭集会のようなものになっていった」(D-3)と言い、また現在も「ハンドマッサージなどで関係作りができると、『今度改めて会わないですか?』と教会に誘う」(D-3)のだという。タイプDのもう1つのグループも、「クリスチャンとして物だけではなく福音を共に持って行くのだと最初から考えていた」(D-1)という。「9月にははっきりと活動の目的が伝道であると、教会のメンバー全員に周知し、ハンドマッサージをしながら福音を分かち合うことができるように現地に行くボランティアには伝道トレーニングを受けさせた。しかし避難所では『伝道に切り替えたな』というネガティブなリアクションはなかった。最初から言葉での宣教と支援がセットだったので、自然に切り替えができた。現在までに20名が入信し、現地の集会所で礼拝を行っている」(D-1)という。

タイプB・CとタイプDの伝道に対するスタンスは一見すると、かなり異なって見えるが、さらに詳しくインタビューしていくと、伝道をしないと宣言しているグループも自分たちの信仰について分かち合う機会を与えられた時、喜びを持ってそれに応じていたことが分かる。彼らがクリスマスのプレゼントを被災者のところに持って行った時、「あなたたちはいつも来てくれるし、基督教なのだから、聖書の話をして欲しい」と頼まれた。彼らがそれに応えてメッセージをすると「皆涙を流しながら聞いてくれた」という。また、別の機会に被災者から「私は皆さんが信じている神を信じます」と言ってもらったという。彼らは被災者の中からそのような告白が生まれてきたことを心から喜んでいる(B-2-1)。

これはDタイプの聞き取りの中からあがってきた内容と全く同じである。Dタイプのグループが伝道を前面に押し出すといっても、仮設住宅での奉仕活動の最中にそのような機会がなかなか与えられるというわけではない。そのような中である日雨が降って、予定されていた泥かきの奉仕活動が出来なくなったという。その時に仮設住宅のリーダーから、「せっかくだから、あなたたちの信仰のことについて、話してもらいたい」と言われ、それに応えることができたということが喜びを持って語られていた(D-1)。ここに示すように、伝道に対するスタンスの全く違う2つのグループが、最終的には同じ体験を喜んでいるということは、心に留めておく必要がある。

また、震災直後は伝道することに躊躇しながら支援活動を始めた教会が、次第に自分たちの信じる神を人々に語ることに自由になっていくというケースもあった。現地教会の牧師は言う。「『この支援は伝道のためにやっているのですか』と聞かれた時、『実のところはあなたたちにキリストを信じてもらいたいんです』と言いたいが、そう言えば相手が拒絶するのではないかと思って、それが私の葛藤でもあった。『救われてほしいための支援』とはなんだろうと、走りながら葛藤した。それに対する答えは、信じてもらいたいからこれをしているのではなく、神様がこうしてくださるからそうしたいのだということであるこ

とに気が付いた……1年経って、福音をダイレクトに伝えるチャンスは増えてきている。最初の頃は支援と伝道との関係が整理されていなかったのが悩んだ。今は初めて会う人に出会っても、『自分たちは神様からいろいろなものを与えられているから、ありがたいからやっている』と言える。『あなたを信じさせるためにやっている』のではない。『信じさせんがため』ではなく『私が何でやっているのか』が大切。『信じさせようとしてやっている』のか『何に動かされてやっているのか』の違いが大きい」(C-1)。

他宗教との連携

教団・教派によって考え方や態度に大きな違いがみられたのが、他宗教（とりわけ仏教）とどのようにかわりつつ支援活動に臨むかという点であった。それは特に「弔い」についての解釈の違いによって一層先鋭化した。仏教との協力関係については、タイプ B では受容、タイプ C はアンビバレンツな見解が混在し、タイプ D ではおおむね拒絶という結果であった。

タイプ B の回答者は、「住民のほとんど 90 パーセントは仏教徒だ。そこで亡くなった人の弔いは仏教がすべきだ。他宗教と合同して祈りながら、キリスト教がどのような祈りを携えているのかを発信していく必要があるのではないか。仙台の火葬場で心の相談室を置いてそこでキリスト教の祈りをささげてほしいと頼まれ対応した。ごく数件であったが、希望者が 1 人でもいればそれに応えたかった」(B-2-1) と述べ、またタイプ B の他の回答者は、「死とどう向き合うかとか弔いの問題は、キリスト教だけでなく宗教として果たさなければならない役割である。現地に行ってみれば『あなたは誰だ』と聞かれる。『自分はキリスト教だ』と言ってみても誰もキリスト教を知らないし、『あれは邪教です』（と他宗教を批判してみても）意味がない」(B-1) と語った。

B タイプのリーダーは、「礫の下に眠っている死者こそが最も小さくて弱くされた人なんじゃないか、その人たちにシーツひとつでもかけてあげられないかという思いはあった。」(B-3)³と、亡くなった人々に対する憐憫の情を語る。しかし弔いを重視することは、単に仏教的な信条を受容しているということではなく、支援活動における実践的な意味づけもある。彼はまた「これから心配されるのは後追いである、十分な弔いが出来なかったことからくる自殺、後追い自殺を予防するためにも十分なケアが必要なのではないか」(B-3)⁴と言う。

タイプ C では、教団のスタンスとしては仏教との協力は難しいが、回答者の個人的な意見としては他宗教と協力し合って行きたいという意見が見られた。「あるキリスト教支援団体の主催で仏教、カトリック、プロテスタントで合同クリスマスを持った。お坊さんがサンタクロースの格好をして参加してくれたりした。ただ、各個教会の判断としては他宗教

³ このコメントはインタビューからではなく、回答者の教会のブログにある彼の言葉を引用したものである。

⁴ 同上。

と協力することはあり得るが、(私の) 教団としては意見をひとつにまとめるのは難しいのではないかと思う」(C-3)。また、「弔いがキリスト教的な死生観とどうマッチするのかなと若干の違和感があったが、葬りならばしっくりくるしお手伝いすることは出来る。教会員の母親が亡くなった時、葬儀社がパンク状態だった。遺体安置所に遺体があったが、それを見て悲しい亡くなり方をしている人がたくさんいるのだなと悲しくなった。葬儀社の人に『牧師なので祈って良いですか』と言ったら、感謝された。何らかの形で慰めを語る。未信者であっても結婚式はやらないが葬儀はする。どんな人でも神に生かされたいという思いはあるから」(C-1) という感想もあった。これらのコメントの中には、若干の違和感を感じながらも、心情的に弔いに関わって行きたいという思いが読み取れる。ちなみに支援活動をしていく中で、位牌探しの手伝いを依頼されるというようなケースもあったという。そのような中である回答者は「『私たちはクリスチャンですから仏壇は探しませんよ』とは言わない。それがやがて伝道につながるのだという確信がある。ボランティアの仕事は将来への準備である」(C-2-1) という態度で対応したという。ここでも、人々との関係性を壊さないように支援であると割り切って行動している様子が窺われる。

タイプDにおいては、「他宗教との関わりはなし」(D-3) が主流である。Dタイプのもう一人の回答者も同様である。「他宗教と組むということはやってこなかったし、実際のところ考えたことがなかった。他の宗教を信じる人たちと活動を共にすることについては、あえてそうする目的を見出すことが出来ない」(D-1) という。弔いについての考えを尋ねたところ、「亡くなった人はすでに亡くなっているわけだから、死んだ人に焦点を当てるよりは今生きている家族に付き添い、別の形でその家族に奉仕をしたい」(D-1) という。Bタイプで「礫の下に眠っている死者こそが最も小さくて弱くされた人なんじゃないか」と語られるのとは対照的に、Dタイプでは死者よりも現在生きている人たちのケアにより強く目が向けられている。

タイプDの中には、関係作りのために他宗教に対し親和性を持って関わって行こうという態度が見られることもあった。「コミュニティーリーダーが私たちにお盆のために寺の掃除をさせていた事に気がつき、『クリスチャンにそんな仕事をさせてすみません』と謝った。その時、『いいえ私たちはボランティアとして来ました。あなたの仕事が私の仕事です』というと彼はとても喜んでくれた。関係作りが鍵です」というコメントがそれを示している(D-2)。ただしD-1に「もし、寺や神社の掃除、あるいは瓦礫の中から位牌を探すといった奉仕活動を頼まれたとしたら、どう対応していたと思うか」と質問したところ、「偶像礼拝は聖書的に受け入れることが出来ないので、丁寧に説明しお断りするだろう」という答えが返ってきた。

行政との連携

東北での支援活動を円滑に行うためには、行政との協力関係が必要である。多くの団体は県や市から要請を受けてボランティア団体として物資の配布、瓦礫撤去、心のケア等の

活動に従事した。また、それによって高速道路の通行証を入手するなどの恩恵を受けた。また、行政主催の報告会に出席する事によって情報収集の機会を得た教団も多かった。しかし、宗教団体が行政と協力しながら支援活動を行うことによって活動の制約も必然的に生じてくる。ある牧師は、「行政側が枠をはみ出た事に対応することが難しいということをよく知っていた。そこで〇〇という支援団体を作り、教会は出さずに『支援団体です』という形で入って行った」(C-1) という。

キリスト教団体が支援に入るということに対する、行政の対応は多様であったようだ。「ある避難所では、いきなり出かけて行ってトラクトを配るという教会があり、『宗教お断り』となったケースがある。受け入れ側がピリピリしているところがあり、反面『教会さん良くやってくれる』とニコニコしているところもあるという状況だった」(C-1) という。それぞれの教団が、状況を見ながら行政と連携して行く中で、その支援活動にも多様性が現われてきた。B-2-1 は「社会福祉協議会とは連携した。『ボランティアが目的ですね』と確認された。勝手な行動はしないように心がけた」と答える。BタイプとCタイプのボランティア活動に徹したグループは、行政の指示に従うという形で公認された避難所や仮設住宅などの支援地域に赴くことが多かったが、それに対し、Dタイプの布教を行いたいグループは行政の支援の手が十分に届いていない部分、例えば住宅の1階を津波により被災したが避難所には入らずに居住可能な住宅の2階に住んでいる人達がいるコミュニティ(そこに住む人達は自分の意志でそこにとどまることを選択しているとみなされたので行政からの支援の対象外になっていた。)に積極的に入り込んでいくというような傾向があったように思われる。Dタイプの典型的な支援活動の展開は、まずメンバーの知り合いなど、被災地域に関わりのある人を見出し、そこを拠点に支援チームを送り込んでいくというものである。その関わりの中で、地区長のような地域のコミュニティリーダーとの親しい関係が形成され、地元リーダーの協力を得ながら炊き出しや物資の分配などを行っていったという(D-3)。D-1の石巻での活動でも、アパート経営者であった地元のリーダーと信頼関係が出来ると彼を助ける形で被災したアパートを再建し、そこが地域の人たちを集めて礼拝を行う場所として用いられていくという一連の流れが見られた。

ただし、伝道を前面に押し出すグループでは社会福祉協議会に受け入れてもらうことが出来ず、十分な展開がなされないままにその地域の活動が終わってしまうというケースもあった。D-1の教会は県外に避難してきた福島県の住民の避難施設で奉仕活動をしたかったのだが、ボランティアとしての申し込みの出遅れと、キリスト教団体であるという理由から住民との直接的な接触が許されず、ただ被災した町に支援金を届けるだけで終わってしまった。それに対して、良く似た状況の中でD-3のグループは、ある公共施設に以前からコンサートの主催者として関わっており、震災の前から親しい関係を持っていた。そこに避難民が来たこともあって支援グループとしてその中に自然に入ることが出来たという。彼らは避難所の人々とも親しくなり、避難していた人達がそこを出るときに自立のための様々な支援物資を個人的に手渡すことが出来たのである。

神学的展望

今回インタビューをしていて興味深かったのは、Dタイプでは自分たちの神学の内容をそのまま受容しているのに対し、BとCのタイプではそれを批判的に省みる努力が表明されていたことである。第1にそれは従来型の宣教のあり方についての反省である。実をいうとタイプCの中には「福音派」のグループが多く含まれているのだが、彼らの言葉の中にこれまでの宣教論を乗り越えたいという願いが見て取れる。「阪神大震災の時に自分達の教団が十分な対応をすることができなかったという反省がある。さらにローザンヌ誓約を学ぶ中で、ホーリスティックな構造改革の必要を感じていた」とC-2-1は答える。

同様に、Cタイプの他の回答者も「宣教活動と支援の関係についてそれが別々のものなのか重なっているのかずっと考えながら走ってきた。どちらかをどちらかの手段として使うのはやめようと思った。神、罪、救いという従来の伝道の枠を超えたものを目指して行きたい」(C-3)と述べる。それは支援の現場に出た時先鋭化されて意識される。「公共に対し自分たちはどんな役に立つのかということ考えた時、救済論のフレームをどう見直すかが大切になる。強盗に遭った者が異邦人のサマリヤ人によって助けられる。それは当時のユダヤ人が聞けばありえないストーリーであった。支援活動をしていてクリスチャンでない人たちの方が良い奉仕をしている場合もあった。それを考えるとき、クリスチャンとしてもっと謙遜にかかわりたいと思う」(C-3)。Cタイプの牧師たちが支援の根拠とする聖書の箇所がルカ10:30-37の良きサマリヤ人の譬え(C-3)であったり、その中のイエスの言葉「あなたも行って同じようにしなさい」(C-2-1)であるのは偶然ではないように思われる。Cタイプはそれまでの言葉のみの宣教に対するリアクションとして、行為そのものを強く打ち出す聖句に魅力を感じているように思われる。「良きサマリヤ人になりたい。その中に神の愛がある」(C-3)と、Cタイプの牧師が言うとき、そこにはクリスチャンでない一般の人々に接する時、最終的に受け入れられ認められるのは行為なのだという意識がある。つまりキリスト者という概念がこれまでの観念的構成要素に重点を置いた実態的な定義付けによってではなく、社会的構成要素に重点を置いた機能的に定義づけによって説明されているのである。⁵

第2に非キリスト者に対して公平に接したいという願いである。Bタイプの教団のリーダーは、自らの阪神大震災での経験をこう語る。「あの時、自分の教会に被災者を受け入れて避難所のような形で提供していたが、その時私たちは自分の教会に避難している彼らに対して伝道はしなかった。もし有利な立場にある私たちが伝道をすればそれはフェアではないと考えたからだ。彼らが自立し自分たちの場所に帰るようになった時、私たちは彼

⁵ このような考え方は、日本の神学的な伝統の中にすでにあると思われる。例えば、内村鑑三は『代表的日本人』(稲盛和夫監訳、講談社、2002年)の中で、時代的文化的制約の中でキリスト教徒とはなり得なかった日本の歴史的人物の生き様の中に、正にキリスト教的な教えの中身が息づいているのを見出そうと試みるのである。

らに初めて伝道をした」(B・2-1)。

相手の立場を尊重し、自分の価値観を押し付けないという多元論化した態度については、Bタイプの牧師ではより精緻化された理論づけがなされ、Cタイプの牧師なら躊躇するだろうと思われるところまで踏み込む場合がある。B・3は、阪神大震災でのキリスト教各教派の活動に対する反省を踏まえ、次のように言う。「韓国系の宣教師たちが神戸に入った時、その強引な伝道の仕方によって現場に混乱が生じた。韓国は基本的に一神教の背景を持つので宗教間で競争しても皆違和感を持たない。それに対し、日本は神仏習合の国なので、競争したり、議論したりすると(人々は)みんな引いてしまう。あるいはそれを叩くという傾向がある。しかし、融和しているとそれに魅力を感じて寄ってくるのだ。お坊さんたちと一緒にカフェをやった。そこには法話を聞きたいという人がいたので知り合いのお坊さんを紹介した。すると次に今度はお坊さんが『キリスト教の牧師もよい話をするよ』と言って自分のことを紹介してくれた。奪い合うからなくなる。しかし分け合えば増えるのだ」(B・3)。彼に対し「クリスチャンとしてここからの一線は退けないという線はあるか？」と質問したところ、「自分は不可知論をとる。仏教のことについては、『私はあなたが何を悟っているのかはわからないが、あなたを尊敬しています』という立場をとるのだ」(B・3)と答えた。また彼は自分のウェブサイトの中で日本聖公会の総主教が6月に仙台で行った説教をしたことを紹介している。その総主教は「教会なんて知らない、クリスチャンなんて周りに一人もいなかったという人達が亡くなって、それを悲しんでいる遺族の人に『大丈夫、あなたの大切な人は今神様の所にいて安らいでいるよ』とはっきり言えるかどうか。その信仰がいま問われているのだ」と語ったという。「その意見に対してあなたはどう思うか」と尋ねたところ、彼もまた、「それは素晴らしいと思った」(B・3)と答えた。彼は今フォーサイスの文献に取り組みながら近代のキリスト教神学が切り捨ててしまった煉獄の問題を再評価しようとしている。

インタビューを終えて

3・11以降、日本のキリスト教会は被災地に入り、それぞれ誠実な支援活動をしてきた。同時にそれは様々なアプローチによるものであり、日本のキリスト教諸教派の神学や実践の在り方に大きな多様性があることを示すものであった。今回のインタビューを通じていくつかの発見があった。まず、「自分達は布教に来たとは思えられない」(B・2-1)や「私たちは商売をしに来たんじゃない、会員を獲得しようと思ってきたんじゃない」(B・3)に見られるように、多くの教派が今回の支援活動を通じて伝道はしないという方針を採っていたということである。そしてそれはいわゆる社会派と呼ばれるグループだけではなく、福音派の中にも広がっている。ローザンヌを通じて福音派の中に宣教の社会的責任についての認識が深まっていることは理解できるが、その方法論については社会派のそれをそのまま受容しているように思われる。そこには様々な理由が考えられる。教団の規模が小さく、キリスト教系のNGOと協力する中で、「伝道はしないで欲しい」と求められ、それに

従ったケースや (C-2-2)、「一般の人達の教会を見る目には『自分達だけで集まっている』と見られているのではないかと思う」(C-3)という言葉にあるようにキリスト教の信仰を強く出すと異質なものと見られるのではないかという恐れ、また「行政ともう少し関わりたい。自分達の働きを認知させたかった」(C-3)という思いなどが深く絡み合っていると思う。(実際、一般的に行政と正式に関わればかかわるほどキリスト教色は消さなければならなくなる。)そのような状況の中で、福音派の中にユニークな伝統として刻まれている「言葉による福音伝道」を保持しつつ社会的なニーズに応じていく方向を共に模索することが福音派に求められているのではないか。さもないと、日本のキリスト教界の流れが全てひとつの方向に向かってしまい、その多様性を失う事になると思われるからである。

思うに今回のインタビューの傾向を見ると、日本においても宗教社会学でいうところの「私事化 (privatization)」のプロセスが進んでいるのが確認できる。私事化とは、「宗教を含む特定の制度領域が公的領域から影響力を弱められ排除されていくプロセス」⁶である。そこには2つのプロセスがある。ひとつはタイプDに見られるように、行政の行っていることと自分達の行っていることを切り分けて、個人的な信仰と心のケアに活動の中心を絞っていく事によって、自らの活動領域を狭めてしまうということである。例えば、上述したD-1のように被災者に伝道したいという願いが社会福祉協議会から受け入れられず、行政の関与する領域から身を引かざるを得なかったというケースがある。彼らは、より伝道に対する受容性の高い領域を求めてそこに活動を集中せざるを得ないが、それはプライベートな領域であり、社会全体に対するインパクトという観点から見ればその影響力は限られたものとなってくるのである。もうひとつはタイプBに見られるように、他宗教を含む多元化した大きな社会の中に適応しようとする事によって、自らの主張を薄めていき、結果的に社会において自分たちを透明化させていってしまうということである。⁷これは、被災地のあらゆる領域の人々に関わる機会を与えてはくれるが、例えば、B-2-1の『ボランティアが目的ですね』と確認された。勝手な行動はしないように心がけた」に見られるように、その支援活動内容は一般のボランティア団体の活動と同じものになる傾向があるから、キリスト教としてのアイデンティティを社会に対して印象付けることは困難になるのである。

タイプCはというと宗教グループとしての自己主張を躊躇しつつ社会に受け入れられていこうとするという点においてはタイプBの透明化による私事化のプロセスを押し進めてしまい、さらにマクロレベルの社会的参与を避け、パーソナルな関係に重点を置く傾向はタイプDが持つ私事化へのプロセスにも加担してしまう傾向を持つ。このように見ると、私事化はとめどもなく進み、キリスト教の持つ役割は社会の中で縮小していき、社会から

⁶ メレディス・B・マクガイア『宗教社会学：宗教と社会のダイナミクス』山中弘、伊藤雅之、岡本亮輔訳（明石書店、2008年、100、504頁）

⁷ これは、キリスト教だけでなく仏教においても同様に見られる現象であるということを経験のインタビューで知った。

求められるのは、ハンドマッサージとカウンセリングだけというような事態が生じるのではないかという危惧の念さえ生じる。

そのような中で、今回のインタビューの中から学んだひとつのケーススタディとしてある教会の体験を紹介してこのレポートを終える事にする。それはタイプ C-1 として紹介した現地教会での出来事である。震災の後その教会がすぐに始めたのは、教会のメンバーの自宅にあった井戸水を隣人に配るということであった。最初それは教会員だけに配られていたが、やがてそれは近隣にも配られた。配り続けたら水が枯れてしまうという恐れがあったが、「みんなを助けて空っぽになるぐらいなら空っぽになろう」と言い出す者があり、教会全体が「その方向性で行こう」という事になり、地域に対する配給が始まった。(地域に水を配り始めると井戸は枯渇することなくさらに水を湧き出すようになったという証しもそこに添えられる。)

「教会さんが物資の配布をしている」ということが地域の議員達に伝わり、5月にその牧師(C-1)は議員達と共に南三陸町に視察に行った。そこで、被災者の話を聞くうちに聞こえてきたのは震災により失業した人達の収入のことだった。主婦を対象に内職を提供できないかと考えた。その地域の被災者は、ただ被災しただけでなく、孤立してやることがないという問題も抱えていた。そこで共に内職に関わることで彼らが会話する場を提供できるのではと考えた。革細工は誰でも入りやすく奥が深いと感じたので、彼らは教会の働きとして商品開発をして販売までの手順を決めた。知り合った議員達も手伝ってくれた。現在10名ほどの人が革細工に携わっているという。地元の人達はその過程を通じて涙ながらに語りかけてくれるようになり、クリスマス頃には教会員と地元の人たちとの良い交流が出来るようになったという。「単に革製品を作るのみならず、共に作業することを通してコミュニティを作ることを目指している」とC-1はいう⁸。彼はまた、「支援する側、支援される側という垣根なしに、『仲間』として一緒にプロジェクトを創り上げていくことへの賛同もいただきました」と述べる。⁹ C-1は今南三陸町に教会が出来たらと願っている。現在彼らは牡鹿半島でも漁師を支援するために養殖業の再建を手伝っているという。

C-1は、「この支援の過程を通じて東北での有効な伝道は個人的一本釣りではなく、コミュニティ全体に働きかけることであると考えようになった」という。同時に、地域の人々とかかわる時気をつけながらやってきたこともあるという。それは「譲れない部分ははじめからはっきりとさせていくということだった。支援活動は礼拝のある日曜日の朝はやらないということ。こちらの方に巻き込んでいくことが大切だった」という。

ここに見られるように、パーソナルな関係を大切にし、自分達のアイデンティティを明確に示しながら人々の生活の基盤を支えるコミュニティそのものをマクロなレベルで支援していくというタイプBとタイプDの統合がひとつの福音派の教会において実践されていることは重要である。この統合が支援活動をより実り深いものとし、私事化というキリス

⁸ 彼らの主催するボランティアグループの機関紙2012年10月号より。

⁹ 同上。

ト教の矮小化に歯止めをかけていく鍵となると思われるからである。

補足

この種のレポートを記すにあたり、支援活動の主体となったキリスト教団体だけではなく、支援を受けた側の人々の声も記録する必要があることは誰もが同意することであろう。あるグループが支援した特定地域の人々の声についてはすでに取材を終えているものもある。しかし今回のように複数のキリスト教団体の活動を報告したレポートにおいて、その中の一部の団体の活動に関する地元の声だけを掲載することは客観性に欠けると思われたので、残念ではあるが、今回は支援を受けた側の声を収録することはしなかった。今回筆者に許された限られた時間において、その作業を十分になしえなかったことを記してこのレポートを終える。

(東京バプテスト教会ミニストリー牧師)